



あらしらみ

元旦号

発行者
村上青年会議所
編集者
会員広報委員会

♣青年会議所とは♣

青年会議所（JC）は、明るい豊かな社会の実現を理想として集まった20歳から40歳の青年の団体です。皆様と共に村上のことを考えていきたいと思えます。



理事長

山貝 勉

新年にあたり御挨拶を申し上げます。日頃は青年会議所活動に御理解と御協力を賜りまして、心より御礼を申し上げます。

今、「第三の開国」と言われる、国際化、自由化の動きや、社会秩序をもたらす情報化・多様化・高齢化への進展は、想像以上の速さで、産業構造の改革や、人々の意識革命を促しています。この様な中で私達は、幸福社会を実現するために、革新的な企業家精神がいきいきと根づいた、個性ある組織、地域づくりが必要であると考えます。昨年、新宣言文が採択されました。「変革の能動者たらんとする青年として、個人の、真に豊かな生活の実現を通して、自立した、快適で活力ある地域を創造し、自由と公正を保障する国家を基盤として、世界の平和と繁栄に貢献し、地球上のすべての人と、共に生きることを誓う」。この考えを基本に各地の青年会議所が活動しております。

我が村上を見る時、自然、風土、人間性などには、大変恵まれています。経済的な面においては、少々おくれいていると言わざるをえません。これを打開する為にも、今、この東北日本海沿岸地域を開発する必要があると考えます。その為には、この地域を結ぶ、高速交通網の整備が急務であります。

本年五月十三日・十四日には、村上において、日本海沿岸東北自動車道の早期実現を目標にした、第二回日本海夕陽ラインシンポジウムが開催されます。青森から新潟までの沿線十九の青年会議所が中心となり、村上地域の各団体の皆様の御協力を得ながら、この道路の経済効果や、街づくり、地域づくり、二十一世紀への展望などを勉強する場にしたいたいと考えております。一人でも多くの皆様の参加と、御支援、御協力をお願い申し上げます。村上青年会議所会員四十一名熱意を持って行動いたしますので、御指導、御鞭撻を心よりお願い申し上げます。



直前理事長

加藤 清司

といたします。

皆様におかれましては、お健やかに新年をお迎えの事とお喜び申しあげます。又日頃は青年会議所活動に御理解を賜り大変ありがとうございます。

先般築島高校の野球部の監督が新発田農業高校野球部を訪れ指導している様子がテレビで放映されましたが、その中で、体力もバットを振るスウィングの力強さもうちと同じだ違うとすれば勝つ事に対する自信があるかどうかだけだ」といわれました。

北海道の十勝地方は一人当りの耕作面積が日本一広い農産地ですが、今から十五年後には余暇の時間が一・六倍に増える時代が到来するのを見こし、豊かな自然を活かしたりゾート地への模索が初められています。今までの「いらっしやいませ」ではなく「おかえりなさい」といって訪れる人を迎える地、つまりすべての人の魂の休息地が将来必ず必要になるという事を信じて取り組んでおられました。

昨年は、理事長職をお預かりしていた為、各地に行き、さまざまな人と話す機会を得ましたが、どこの地域にも真に豊かな為には必ず解決しなければならぬ課題があり、その課題を越えるために真険に取り組んでおられました。そしてその方々は共通して眼に見えないものを信じて自分を賭けておられました。

私達もかけがえのない郷土がより豊かになるという事を信じて自分のできる事をやっていかなければと考えます。本年村上青年会議所は山貝理事長のもと、この地域に絶大なインパクトを与える、日本海沿岸東北自動車道の早期実現を念願し地域振興ビジョンを探る、第二回日本海夕陽ラインシンポジウムが村上で開催されますが、皆様の御指導御協力をお願いいたしますと同時に当シンポジウムに積極的に参加される事を切にお願い申し上げます。

姉妹J.C 鯖江青年会議所25周年

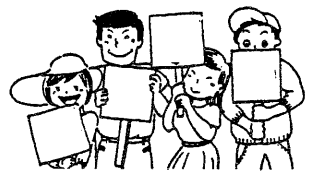
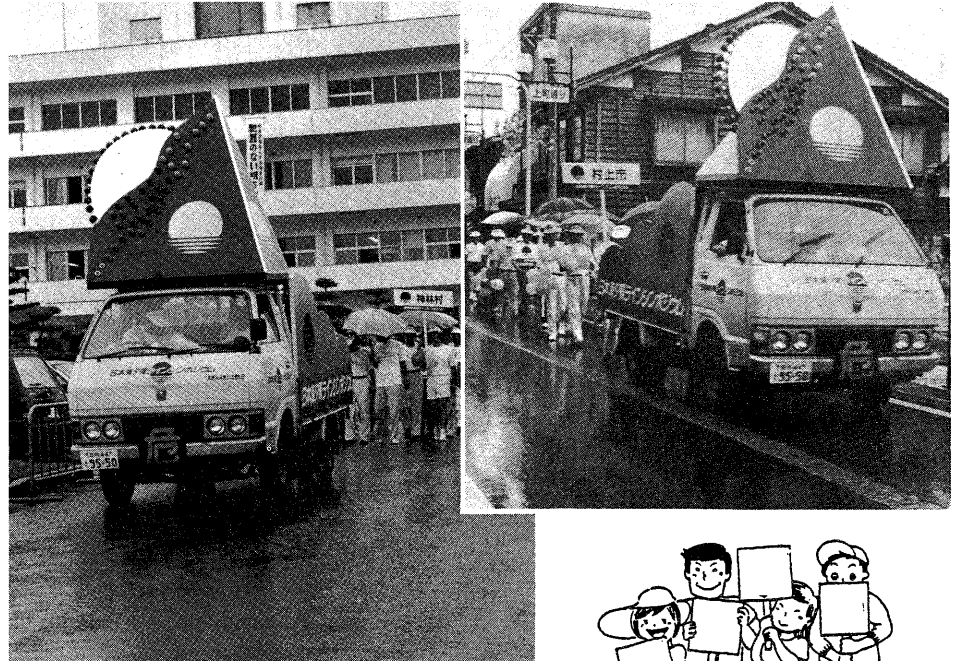
姉妹J.Cである鯖江青年会議所が創立二十五周年を迎え、村上から総勢二十二名で八月七日の記念式典に参加してきました。

記念式典、大懇親会では村上J.Cが大歓迎をうけ二十二名全員が鯖江に来てよかったと思われました。

二泊三日で鯖江へ行ってきましたが二泊ともバスの中だったので全員が、ものすごく疲れが帰ってきました。



夕陽ラインキャラバン



それは、一九八八年から、新潟、山形、秋田、青森の各青年会議所が連携し、沿線各地で展開し続けた、民間主導による各地域の個性あふれる町づくりと、日本海沿岸東北自動車道建設の促進運動を言う。高速道路（日本海夕陽ライン）——それは夢街道であった。

歴代の各地青年会議所理事長達が臨席して盛大な開通式が催されたから数年、沿線各地で展開されて来た個性ある町づくり運動が効を奏してか、リゾート地として、あるいは産業都市としてそれぞれ安定して発展する段階に至っている。また、高速交通網が完成間近なこの頃、自動車の高性能化と相まって高速道路は超高速利用が可能となり、国内における移動手段としては、圧倒的に自動車が多用されるようになっていたのである。

私は先週青森で開かれた『週末利用住宅の空調システムセミナー』に参加した。——近頃は二トハウスを持つ事が大衆化し、山紫水明の地、村上においても需要が増大しているのだ。——我家を午後二時に出発し、北越インターから高速道に乗り自動走行路線に入った。車の流れはスムーズだ。オートスイッチを入れ先行先の青森を設定すると、あとは車両位置や速度等が自動的にコントロールされる。

到着まで約四時間、街並みに明りがともる頃青森の宿舎に入った。各地から高速道を使い、ほとんどその日の内にやって来たのだと思うが、既に大半の人達が到着していた。車の中で仕事や読書をしな

から移動出来る事もそうだが、年寄りの長距離ドライバーが激増している事にも驚かされる。

近頃村上には、やすらぎと人間性回復の地、マザータウンとして全国的に知られ、来訪者が年々増加している。人口の老齢化が続く中村上ではそれに合せた施設改善を早くから取組んでいた事も一助しているのだと思うが、老人会等だけでなく、親孫三代での家族旅行等が増加して来ている事も注目されると思う。

そんな幸な町に住んで居る私なのだが……。たまには、と言う事で来月ばあさんと私は、孫が小学校の撰択実習で大隅宇宙開発センターに行く事になったので、送って行くという名目で薬湯の里、別府に立ち寄り、湯治をして来る予定である。

西暦二〇一六年、私は六十一才、妻は六十才である。

武家屋敷シンポジウム参加



村上にある国指定重要文化財の「若林邸」（武家屋敷）が修復工事を終え、一般公開されるのを機に、時代とともに消えゆく武家屋敷への市民の関心を高め、保存運動の輪を広げようと、九月十五日夜、「武家屋敷シンポジウム」が村上市体育館で市民ら約四〇〇人が参加して、開かれた。主催は、実行委員会（市民憲章推進協議会他青年会議所を含む八団体）

- 構成団体
- 村上市文化協会
 - 村上武家屋敷保存研究会
 - 村上中央商店街振興組合青年部
 - 村上21・建築士会青年部
 - 村上法人会青年部
 - 村上市青年団連絡協議会
 - 村上商工会議所青年部
- 内容は、賀古唯義先生による基調講演「村上再発見」、次いでパネルディスカッション、一般質問・意見・最後に、決議文を採択して終了しました。
- 皆様、武家屋敷保存会に協力しましょう！



地球の上に新しい軌跡

第2回日本海夕陽ラインシンポジウム

日本海沿岸東北自動車道早期実現!!

5月13(土)14(日) 村上で開催!!

主催 村上青年会議所

陳情書

新潟県、山形県、秋田県の日本海沿岸地域の振興につきましては、日頃から御高配をいただき深く感謝申し上げます。

さて、日本が永続的に繁栄していくためには、国土の均衡ある発展が必要条件であると考えますが、私達の住む東北日本海沿岸地域は広大な土地・豊かな水資源に加え、美しい自然にも恵まれ今後発展するに十分な可能性を秘めております。この地域が高速交通体系の中に組み込まれ関東及び関西圏そして、全国との交流が強化されるならば、国家の中で独自の役割を果たす地域に変貌していくものと信じます。私達は日本海沿岸東北自動車道の実現により、沿線地域の発展を通じ日本の繁栄に寄与できるものと考えます。

建設省並びに関係御当局の御高配により、本路線が国土開発幹線自動車道に組込まれましたことに対し深く感謝し心から御礼を申し上げます。

つきましては、新潟から秋田まで三県300kmに及ぶ沿線住民の熱意と期待を込め、御配慮を賜りたく陳情致します。

陳情先名簿

- 一 自由民主党三役
 - 安倍 晋太郎 殿
 - 伊東 正義 殿
 - 渡辺 美智雄 殿
- 二 国土開発幹線自動車道建設審議会委員
 - 衆議院議員
 - 小沢 辰男 殿
 - 森 喜朗 殿
 - 中村 茂 殿
 - 参議院議員
 - 伊江 朝雄 殿
 - 坂野 重信 殿
 - 宮田 輝 殿
- 三 建設省関係
 - 大臣
 - 建設省道路防炎対策室長 小川 仁一 殿
 - 大次官
 - 建設省道路環境対策室長 井上 孝 殿
 - 事務次官
 - 建設省有料道路課長 鶴岡 洋 殿
 - 技監
 - 建設省高速国道課長 小川 仁一 殿
 - 官房長
 - 建設省国道第一課長 小川 仁一 殿
 - 建設省道路局長
 - 建設省国道第二課長 小川 仁一 殿
 - 建設省道路総務課長
 - 建設省地方道課長 小川 仁一 殿
 - 建設省道路管理課長
 - 建設省市町村道室長 小川 仁一 殿
 - 建設省企画課長
 - 建設省道路経済調査室長 小川 仁一 殿



第二回日本海夕陽ラインシンポジウム

趣意書

第二回日本海夕陽ラインシンポジウム実行委員会

委員長 山 貝 勉

二十一世紀に向かって「地方の時代」「地域の活性化」が叫ばれて久しい現在我々の住んでいる東北日本海沿岸地域は、広大な土地豊かな水資源、海あり山ありの観光地等、今後開発されるに十分なポテンシャルを持つ地域であります。

第四次全国総合計画においては、地方圏の発展を促進するために、いまだ完成していない地方主要都市を連絡する全国的なネットワークを早期に完成させ、各地域間の交流円滑化を進めようというたわれっております。

これを当地方にあてはめた時、現況においては、高速交通体系の空洞地域であり、大都市圏及び全国との交流が弱く、閉鎖的な地域構造をもっていると考えられます。さらに太平洋側と日本海側の格差が拡大しつつある現在、日本海沿岸東北自動車道は、その開通により地域産品の市場拡大、先端技術型企業の進出、地域間分業ネットワークの形成、そして広域観光ルート等が実現し、沿線地域の産業、経済、文化にきわめて多くのインパクトを与える重要な路線になります。この認識のもとに一九八八年第一回「日本海夕陽ラインシンポジウム」(酒田市、鶴岡市)に引きつづき、一九八九年第二回「日本海夕陽ラインシンポジウム」を村上市において開催致します。

このシンポジウムを通じて沿線各地域が互いに交流を深め、地域ビジョンを打ち出し、「真の日本海時代」に向けて、大きく前進することを念願致します。各位におかれましては、この趣旨をおくみとりいただきまして、何卒ご指導ご協力の程お願い申し上げます。

